

令和元年度
大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業
報告書



福島県双葉郡川内村第四行政区
上智大学 学生地域社会研究グループ

目次

1. はじめに
 - 1-1. グループ紹介
 - 1-2. 川内村について
2. 1年目の振り返り
3. 2年目の活動報告
 - 3-1. オリジナル冊子作成
 - 3-2. 上智大学ソフィア祭での展示
4. 今後に向けて
5. おわりに

1. はじめに

1-1. グループ紹介

私たち上智大学 学生地域社会研究グループは、地域社会学や生活史を専門とする上智大学総合人間科学部社会学科の植田今日子教授の指導のもと、社会学科3年の有志5人によって構成されている。社会学科では環境社会学及び民俗学や、社会学的調査分析を学んでいる。

1-2. 川内村について

川内村は福島県の浜通りに含まれ平成30年9月1日時点で住基世帯は1,262世帯である。しかし、村内生活世帯数は917世帯となり、高齢者率は約38%にのぼる。（川内村公式HPより）また、村は8つの行政区に分かれており、下図の平伏沼周辺が第四行政区である。今日村の人口は都市化により、都市へ人が流出していき若者を中心に減少していった。



図1 川内村地図（川内村公式HPより）

さらに東日本大震災の際、川内村は全域が福島第一原発から30キロ圏内に含まれていたため、全村避難が余儀なくされた。しかし、実際は地理的条件により避難先の郡山等より放射線量が低かったことなどから、村民の方々の尽力のもと、約1年後に帰村宣言が出された。震災後の帰村状況として子どもが避難先での学校に通いはじめ、そこでの生活が出来上がってしまっているなどの理由から小中高生がいる家庭の帰村率が低いことが挙げられる。

現在では商業施設やレジャー施設の運営が再開されている。また、企業誘致や新たな農業・産業としてワイン造りの取り組みもなされている。

2. 1年目の振り返り

2018年8月から12月にかけて計6回川内村を訪問し、村民の皆様にとっての「とっておき」を教えて頂く「とっておきプロジェクト」をコンセプトに活動をした。具体的には婦人会の

方と郷土料理作り、区民祭への参加、村民（移住者も含む）へのインタビューである。8月から調査に入ること、四季折々の川内村を楽しむことができた。もちろん多くの集落がそれらを有しているが、それぞれの自然や人柄はその土地こそその資源であると改めて感じた。

また、村の特産品としては、蕎麦といわなが代表的なものとして挙げられる。蕎麦は川内村祭りでの販売や、「そば道場」という施設では蕎麦打ち体験をすることが可能だ。加えて、蕎麦粉に加工しそれを利用することにより、新商品開発の可能性も考えられる。いわなの郷で行った聞き取りでは、リピーター客も多く、いわなが活性化につながっていることが分かった。

以上のことから、私たちは関係人口を増やすことを最終的な目標として掲げ、多くの方々に知ってもらう機会の創出が第一歩であると考えた。現状学生の自分たちの行い得ることを考えた結果、川内村の魅力を発信する媒体として関わっていく必要性を感じた。魅力を知ることが関心に繋がり、足を運ぶ「きっかけ」ができる。関心を持ってもらい、観光地として川内村を1つの選択肢に加えること、それを目指し、私たちは「きっかけ作り」をキーワードに3つの活性化案を三本柱として打ち立てた。



図2 実態調査の様子（区民祭）

3. 2年目の活動報告

2年目に向けて私たちが出した活性化案は3つある。①Instagramの開設 ②オリジナル冊子制作 ③上智大学ソフィア祭でのPR活動である。1つ目のSNSに関しては、1年目の11月より開設し現在も我々のグループで運営しているが、昨年より引き続き実施しているため、本章では主に2つ目と3つ目の提案に対して実施した成果報告を行う。

3-1. オリジナル冊子作成

活動1年目の「実態調査」で川内村第四行政区の方々にヒアリングを実施した結果、移住者の増加も望んではあるが、まずは村の関係人口を増やすことを目標としていることが分かった。また、川内村の課題として村の外への情報発信が弱い、という話も聞くことができた。

そこで、川内村の方々のお話を伺う中で、その「想い」や、「魅力」を外からの視点で、「生」の声をより多くの人に伝えていきたいと考え、冊子の作成を行うこととした。冊子は、2段階に分けての制作を予定した。1段階目の冊子は11月に実施する上智大学ソフィア祭での配布用、そして2段階目の冊子は、1段階目を更にバージョンアップさせたものを学外に設置してもらうためのものとした。

上智大学ソフィア祭で配布するための冊子の目次は以下の通りである。

1. 私たちの紹介
2. アクセス
3. 川内村ってこんなところ
4. 川内村のご飯
5. 想い～三瓶保彦さん・秋元英男さん～
6. あとがき

これら6点に絞った理由は、上智大学ソフィア祭で配布する冊子の意義を考えた際に、気軽に川内村を知ってもらい、足を運んでもらうきっかけづくりをすることにあると考えたためである。そのため情報を多くすることよりも、気軽さや手軽さを重要視し、このような目次となった。内容の紹介をすると、「川内村ってこんなところ」というページでは、川内村のマップと各施設の紹介をしている（図3参照）。営業時間など基本情報だけでなく、自分たちが行って感じたコメントなども書くことで、オリジナルなものとなっている。他にも、「想い」のページでは、私たちがお世話になっている秋元様や第四行政区区長である三瓶様から聞いた川内村に対する想いを掲載している（図4参照）。手軽さを重要視した今回のバージョンにおいても、お二人の想いというのは自分たちの活動の一つの指針となっているため、載せることとした。



図3 「川内村ってこんなところ」

人のつながり——

秋元英男さんは、農事組合法人「農業大業」理事をされています。震災後、川内村では2013年からお米作りを再開し、現在4区にある田んぼ約50ha中20haはこの法人で運営しています。

また、野菜などの自給自足は村の皆さんの生活の一環となっており、そうした土地の手入れも生きがいになっているそう。それゆえ、震災時、避難先ではそれができなくなるので、認知症になる人も出たそうです。秋元さんに村での生活をお聞きしたところ、大家族の良さについてお話ししてくださいました。

家にお父さんお母さんだけでなく、おじいちゃんおばあちゃんも一緒にいることで、子育てに余裕が生まれる。

「逃げ道って子どもに必要なんだよな、やっぱり。」

しかし、震災をきっかけに、そうした世帯は減少しています。小さい仮設住宅で暮らさざるを得なかった避難生活により、家族が世代別に離れ、そのままというケースが増えているのが現状です。また、村ではみんな顔見知りや挨拶をしあう仲なので、子どもも安心して過ごせるという点も良いところのこと。

ちなみに、秋元さんの川内村のお気に入りや、「中にずっぱりいる人は意外と分かんない」「でもやっぱり千歳川とかね」と教えてくれました。



秋元英男さん

20

「そりゃ大歓迎だべ」——

三瓶保彦さんは川内村第四行政区の区長を勤めています。

「救急車がいれば追っかけてくんだからな、そいで黙って耳を澄まして、止まったっていうとみんな集まってきて。」

区長やってる立場だから、みんな必ず俺に電話をかけてくる、どこだあってそれで足運んでどうしたの、こうしたのってなっちゃうんだけど、まあそれがいいんだよな」この言葉が、川内村の、そして区長さんの、おいを思いやり、支えあう姿が映し出されているように感じました。

高齢化率が高まる川内村第四行政区で、三瓶区長は住民の「健康寿命」を伸ばし、健康で生き活きた生活を送ることができるよう老人クラブが使用するゲートボール場の整備や、高齢者の見守りを積極的に行っています。しかし、それと同時に、村に新しい人が入ってくることに對しての思いを伺うと、「そりゃ大歓迎だべ」と、力強くおっしゃいました。「やっぱり子供はいいよな、運動会はやるけど、今は子供が少なくて村民大会のようなものだし…」と、多くの子供たちの声が再び村中に響き渡るのを心待ちにしています。

東京から来た私たちのことも、お忙しい中いつも気にかけてくださり、強くて、温かい、お父さんのような存在です。



三瓶保彦さん

19

図4 「想い」

3-2. 上智大学 ソフィア祭での展示

活動1年目の「実態調査」を通して知った川内村の魅力を1人でも多くの人に伝えるために、大学にとって大きなイベントの1つであるソフィア祭でのPRを今年度の活動の軸とした。ソフィア祭では、上智大学の学生だけではなく高校生やその保護者など多くの方に見てもらえる、またとない機会であると思い、またイベントということで気楽さをもって参加してくれるのではないかと考えたからである。

ソフィア祭の開催日は2019年11月2日（金）～11月4日（日）であり、「福島もりあげっ課」としてブースを出した。この企画は、福島県飯舘村で活動している上智大学生の別グループとの合同企画として行ったものである。私たちの展示は主に川内村の風景写真とし、川内村の空気を感じてもらうことを目的とした。写真は地元で開催されたコンテストの写真を、許可を得た上で使用し、A3の大きさで印刷したものをパネルに入れ、三脚に立掛け展示した。また、私たちが現地で活動している様子を撮影した写真も教室の壁に貼り紹介した。

ソフィア祭では写真展示の他に、福島県のソウルフードである凍み餅と、川内村の特産品である蕎麦の実を使った蕎麦茶を来場者に無料で提供した。使用した凍み餅やそれに合わせるタレの材料である「じゅうねん」（えごま）の実、蕎麦茶の蕎麦の実はいずれも川内村で生産されたものである。また、飲食スペースに先述したオリジナル冊子を置いておき、自由に見て持ち帰ることができるようにした。提供の際にはその冊子とともに自分たちの活動の「想い」を紹介し、最後に川内村に来場者の声を届けるため、ブースや活動についてのコメントを付箋に書いてもらったものを模造紙に集めた。

計3日間のソフィア祭で、教室来場者は、1日平均100人という、想定を上回る結果となった。試食提供で準備していた凍み餅300人分も、最終日までに全て提供することができた。来場者の年齢層は、子どもから年配の方まで幅広く、福島県にゆかりのある方、東北地方にゆかりのある方もいたが、福島県を訪れたことのない方も多く来場していた。凍み餅を食べるのは初めてという方がほとんどであり、その見た目に驚きつつも、とても美味しいという

感想を多くもらった。来場のきっかけは、パンフレットやチラシの「福島」という文字を見て、このような活動をしていることに関心を持ったからという方、教室に展示していた写真に惹かれて教室に入ってくれた方など様々だった。凍み餅の無料提供をきっかけに来た方は割合として3割程度で、多くの方が内容に関心を持って来場していた。



図5 来場者のコメント

来場者からのコメントでは、凍み餅の美味しさに感動する声、私たちの活動や福島の方々に応援するメッセージ、「ぜひ川内村に行きたくなりました」というメッセージなど、たくさんのあたたかい言葉を頂いた。ここで、その一部を紹介する（上記の写真参照）。

「何が自分にできるか…問い続けながら、3.11を忘れずに、又福島的美しさを見に行けたらいいと思いました。出会いに感謝して」

「凍みもち、本当に美味しかったです。実は福島に一度も行ったことがなく、是非行かなければ！！と思いました。写真素晴らしかったです」

「川内村のことはよく知りませんでした、とても自然が豊かで美しく、地域の方々の温かさが伝わってきました」

来場者の反応から、川内村の雰囲気や私たちの想いが伝わっていることが実感でき、嬉しく思った。上智大学ソフィア祭を訪れたことをきっかけに、川内村、飯舘村のことを想う人が増え、訪れるきっかけになることを願っている。



図6 ソフィア祭にて配布したチラシ



図7 来場者の様子



図8 展示の様子

4. 今後に向けて

冊子の作成と上智大学ソフィア祭でのPRを終え、今後自分たちのグループは上智大学ソフィア祭用に作成した冊子のブラッシュアップに取り掛かる。第3章1節で示した目次に加え、更に川内村の魅力を伝えられるよう、以下の目次を足す。

- ・ 凍み餅について
- ・ 川内村の魅力
- ・ 川内の声
- ・ ソフィア祭での活動

川内村の魅力や声では、上智大学ソフィア祭のために作成したバージョンにはページの関係上掲載することができなかったが、村のために活動している方や移住者の方々からヒアリングした時の内容をまとめ掲載する。そして、目次を足した上で、この冊子を、川内村内の各施設、福島県の施設や東京都内にある福島県のアンテナショップなどと交渉し、置かせていただく予定としている。

5. おわりに

今回この活動を始めて2年が経った。活動1年目の「実態調査」の年には、可能な限り川内村を訪れ、皆様の「想い」を伺い、川内村の魅力や皆様のあたたかさを私たち自身が存分に感じた1年だった。川内村を訪れる度に、この村の魅力をより多くの人に知ってもらいたい、川内村のことを知っている人を増やしたい、という想いが強くなった。そこで2年目の「実証実験」では、①Instagramの開設 ②オリジナル冊子の作成 ③上智大学ソフィア祭でのPR活動を行った。

特に、上智大学ソフィア祭でのPR活動では、活動1年目に多くの村民の方々のお話を伺うことができたからこそ、来場者にも川内村の方々や私たちの「想い」を伝えることができ、2年間活動を継続してきた意義を感じることができた。また、「川内村に行ってみたくくなりました！」「今度、東北に帰省するときに川内村まで足をのばしてみます！」といった言葉を来場者の方々から頂けたときには、本当にうれしく、わたしたちの「故郷」川内村のことが誇らしく思った。

「大学生の力を活用した集落復興支援事業」としての活動ではこの2年目で一区切りを打つこととなるが、今後も継続的に川内村を訪れるとともに、川内村のことを、福島県のことを多くの人に伝え続けていきたい。

謝辞

2年間の活動を行うにあたり、川内村第四行政区の三瓶区長をはじめとし、川内村第四行政区及び村民の皆様、川内村役場の皆様に、多大なるご協力をいただきましたこと、大変感謝しております。また、福島県庁の皆様には、このような貴重な活動の機会をいただけましたこと、また活動へのご支援をいただけましたことを心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

上智大学学生地域社会研究グループ一同